SPECIAL

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

# 小・中・高のつながりを見据えた改訂

根岸雅史（東京外国語大学）

## 変革の *24NC*：インパクト

*NEW CROWN* は，平成 24 年度版（以下 *24NC*）において「基礎基本の知識・技能を習得し，それらを活用しながら思考力，判断力，表現力を育成する」という改訂学習指導要領の各教科共通のキーコンセプトを実現するために，レッスン構成を従来のものから大幅に改訂し，レッスンの前半を GET，後半を USE として，学びのプロセスが見える形にしました。また，「4 技能のバランスのとれた育成」という学習指導要領外国語の改訂の趣旨を踏まえ，USE Read を *Book 1* 後半以降の全 Lesson に配置して読む活動を充実させ，同時に GET Practice や USE Write などで書く活動も強化しました。

これらの改訂は，従来の授業からの変革を求められるものであったため，当初はとまどいを持って受けとめられた先生方もいらっしゃったかもしれません。しかし，徐々に「生徒が力をつけているのを目の当たりにした」といった，新しいレッスン構成についての肯定的な反応をいただくようになりました。これはおそらく，私たち編集委員会が長時間議論してきた改訂の趣旨をご理解いただき，授業展開を工夫していただいたことによるもの，と受けとめております。ご尽力いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

## 熟成の *28NC*：極める改訂

平成 28 年度版 *NEW CROWN*（以下 *28NC*）は，上記の状況を踏まえ，レッスン構成は大きく変更しない方針を立てたうえで，実際に教科書を使われている先生方からのご意見をつぶさに検証し，使い勝手を向上させました。さらに，英語教育が大きく変わろうとする状況を見据え，小中高とつながる英語教育の中核をなす中学校で，確かな英語力が身につく教科書を目指して改訂を行いました。

以降，改訂にあたって力点を置いた 4 点ご紹介します。それらは *24NC* の改訂から継承されている「ことばを使う力」「自ら学ぶ力」「他とかかわる力」の 3 つの力の育成という教育理念と深くかかわっています。すなわち，「ことばを使う力」は次の①②に，「自ら学ぶ力」は③に，「他とかかわる力」は④に対応しています。それらを踏まえて，お読みいただければ幸いです。

### ①スモールステップの言語活動

*28NC* の言語活動においては，スモールステップを心がけ，学習の手順が見えるようにしています。USE Write, USE Speak などの表現活動では，「モデルの提示→モデルの分析タスク→自作の展開」を基本構造とし，小タスクを重ねながら，ていねいにアウトプットに導いています。そのため，従来 1 ページであったものを 2 ページ配当としています。USE Write では，自作をする前に，クラスやグループで 1 つの英文を作成する活動を取り入れました。仲間と協力して英文を作成するプロセスを体験することにより，英文作成の手順や英文構成への理解が深まり，書くことへの苦手意識が強い生徒も取り組みやすくなります。

また，USE Read においても，英文を読む際に，「概要把握→詳細理解→整理」の 3 段階で，それぞれ視点を変えて繰り返し読むタスクを配置し，スモールステップを実現しています。

こうして，それぞれの USE の活動でつけた力は，学期に 1 回配置された集大成の言語活動 Project で発揮できるように構成されています。

### ②ジャンル意識

各技能とも，英文のジャンル意識を高めました。例えば，USE Speak は，「発表」（スピーチなどのモノローグ），「会話」（双方向のダイアローグ）と分けました。両者はどちらもスピーキングの活動ですが，それぞれ別の力が要求されるため，構成やタスク内容を変えています。

USE Read は「説明文」「意見文」「物語文」の 3 つのタイプに分け，それぞれのテキストタイプに応じた読む力が育まれるようなタスクを設定しました。例えば，物語文であれば，あらすじをつかむタスク，意見文であれば，核となるメッセージをつかむタスク，となるように意識しました。

USE のページには，ジャンルがアイコンで提示されていますので，生徒にも意識を喚起できるようになっています。中学校段階では，さまざまなタイプの英文すべてにうまく適応できることまでは求められないかもしれませんが，多くのジャンルに触れ，意識をしておくことは，英語学習の次のステップにつながるものと考えます。

### ③メタ学習スキル育成の強化

どの教科もそうですが，とくに語学の場合，学習量の確保が求められることは論をまたないでしょう。学習指導要領でも「自ら学ぶ力」と位置づけられ，強調されているように，授業以外の場面でも継続して学ぶ意欲と自学自習できる力を生徒に身につけさせたいものです。近年はアクティブ・ラーニングや協働学習など，教師主導の授業観から生徒主体へ，という新しい潮流も出てきています。

*28NC* では，自学自習できる力の育成につながる内容を強化しました。*24NC* から掲載されている「この課で学ぶこと」「文法のまとめ」などに加えて，各言語活動に「Tips」を用意し，各技能を高める「コツ」を明示しています。さらに「For Self-study」では自学自習のヒントや方法を提示しています。

自分の英語力をセルフチェックできるよう，Words や「基本文のまとめ」（付録）にチェックボックスを，さらに CAN-DO リストのページ「What Can I Do?」を設けました。特に CAN-DO リストについては，各学年の終了時に何ができるようになっているのか，と生徒自身が自分の力を見つめることが，高校の英語学習につながっていくものと考えます。

これらは，生徒自らが読んでわかるような記述になっていますので，実際の授業においては注意を促す程度でも効果はあると考えられます。随所にちりばめられた情報に，生徒自身が意識的にアクセスすることで，「英語の力」はもちろんのこと，「英語を学ぶ力」をも身につけることを期待します。

### ④生徒が共感できる題材

今回の改訂にあたって，従来より好評をいただいているキング牧師のような題材については残しつつ，生徒が共感できる新教材を発掘することに意を用いました。世界中の子どもたちに親しまれている Peter Rabbit の話（2 年 Lesson 2）や中学時代にテニス修行のために単身渡米した錦織圭選手の物語（3 年 Let's Read 3）などは，その方針の下，新しくラインアップされた題材です。

また，GET から USE につながるストーリー性を強化し，GET Practice や USE の言語活動にも久美やポールなどのメインキャラクターを登場させることで，キャラクターの世界につながりをもたせて提示するようにしました。生徒は意識を寸断されることなく，興味を持続させながら学習に取り組めることと思います。

## おわりに

以上，今回の改訂の 4 つのポイントを挙げさせていただきました。

*28NC* を縦横無尽に使うなかで，高校・大学へとつながっていく確かな英語力を生徒たちが身につけ，卒業してからも英語学習を続けられる基礎的な学習スキルを獲得できることを期待しています。また，*NEW CROWN* の題材を通して，日本の中学生がさまざまな視点から物事を考えることができ，豊かな感受性を持った人間に育つことを願っています。